
TYPE-MOON総合～紅い月の下の死闘～

Rumia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TYPE - MOON総合〜紅い月の下の死闘〜

【Nコード】

N3840T

【作者名】

Rumia

【あらすじ】

紅い月の下での出逢いが全てを狂わす。
ハイスピードバトル戦記。

プロローグ Fate side

始まりはいつも突然だ。

それは、いつもどりの朝からすでに始まっていたのだ。

この俺、衛宮士郎はいつもと同じ普通の朝を、過ごしていた。

桜「先輩おはようございます」

桜は家の家事などを手伝ってくれている、友達の妹だ。

セイバー「おはようございます、士郎」

セイバーはなぜかわからないがまた現界している。

セイバーの話だと他の奴らも何人が現界しているらしい。

士郎「おはよう、桜、セイバーも」

大河「私は？？」

この人は藤村大河、切嗣が死んでしまったあと俺の世話などをしてくれた人だ。

士郎「藤ねえも、おはよう。」

桜が朝ごはんの準備をしているので手伝おうと思いき桜に声をかける。

士郎「桜、手伝うよ。」

桜「いいえ、先輩、今日は大丈夫ですよ。」

いつもは手伝うことを断ってきたりしないのだが？

遠坂「おはよう、衛宮君」

こいつは遠坂学校では才色兼備の優等生だが実は猫かぶった魔術師である。

士郎「なんで遠坂がここにいるんだ!？」

遠坂「なんでって、たまたま桜に出逢ったからに決まってるでしょ」

士郎「まあいいか」

いつも通りの日常。

いつも通りの風景。

強いて言うならば、その日の夜は、月が紅かった。

Fate side キャラ紹介

衛宮 士郎

Fate sideの主要人物。

今回使用する予定の武器

勝利すべき黄金の剣

カリバーン

かんじょう・ほくち

干将・莫耶

ロー・アイアス

熾天覆う七つの円環

アンリミテッド・ブレードワークス

無限の剣製

等で戦う予定。

セイバー（アーサー王）

使用する予定の宝具

約束された勝利の剣

エクスカリバー

アヴァロン

全て遠き理想郷

インビジブル・エア

風王結界

等で戦う予定。

遠坂 凜

使用する予定の武器

宝石魔術

ガンド

等で戦う予定。

アーチャー（エミヤ）

使用する予定の宝具

干将・莫耶

偽・螺旋剣（カラドボルグー）

ロー・アイアス

熾天覆う七つの円環

無限の剣製 (unlimited blade works)
等で戦う予定。

Fate side キャラ紹介(後書き)

後々新しいキャラを登場させる予定なのでその時はまた紹介します。

プロローグ 月姫 side

俺の名前は、遠野志貴つい最近まではごく普通の高校生だった。俺はある日を境に物の死が見える目、直死の魔眼を得た。今まではこの目を使うことはあまりなかったのだが、アルクエイドとの出逢いによって世界が一変した。

「志貴く〜!!」

噂をすれば本人の登場だ。

「志貴、今日は随分早いんじゃない？」

「当たり前だろ!!朝ポスト見たらお前の文字で、あの公園で待ってるよ。って書いてあるんだから。」

そう、アルクエイドはロアとの戦いのあと確かにこの町からいなくなったはずだったのだ。

「何か、志貴と一緒に居てもいいかなって思ったの。」

一緒に居てもいい？

確か吸血衝動が抑えられないから俺の前から居なくなったんじゃない？

「志貴がロアを倒したから私は100%の力を使えるようになった、だからもう暴走することはないから大丈夫なのよ。」

「もし暴走するようなことがあったら??その暴走は誰が止めるんだ?」

「あなたがいるじゃない、便りにしてるわ志貴！」

久しぶりにきたこの無茶ぶり。

もちろん俺はこう返す。

「あまり無茶言つな！このバカ女ー！！！」

望んでいた日常。

しかしその日の夜、俺は見たのだ、紅い紅い月を。

ブログ 月姫 side (後書き)

月姫 sideのキャラたちの強さが異常なのでFateのキャラ
たちをどれだけ超人化させようか悩みます！

月姫 sideのキャラ紹介もそのうちアップします！

月姫 side キャラ紹介

遠野志貴

月姫 sideの主要人物。

使う予定の技

七夜のナイフ

何故か使える体術

直死の魔眼を使用した一撃必殺

等の危険極まりない技の数々で敵の死を狙った戦いをする。

アルクエイド

使う予定の技

空想具現化

爪を使った技

「暴走した場合の技」

鎖を使用した拘束または打撃

ブルート・デイ・シユヴェスタア

等の技を使い敵を圧倒する。

シエル

使う予定の技

黒鍵投げ

第七聖典

等の技を使った不死という利点を使った力任せな戦いをする。

七夜志貴

使用する予定の技

七夜の短刀を使用した暗殺術

空間移動

等の技を使用した空間移動による常に敵の視界から消えるような戦闘を得意とする。

月姫 side キャラ紹介(後書き)

次から本編を書き始めます。

頭があまり回らないので本当に不定期更新です。

頑張って書きますので！

見ていただけると嬉しいです。

第1話

F a t e s i d e

月が紅い。

何か嫌な感じだ。

俺、衛宮士郎は何か気晴らしにさんぽでもしようと思いきセイバーに声をかけた。

「セイバー、さんぽにでも行かないか？」

「私も暇でしたし、いいでしょう、行きますよ、シロウ」

F a t e s i d e o u t

月姫 s i d e

「月が紅いわね」

アルクエイドのなんでもない一言だった。
確かに月が紅い。

「見回りにでもいくか？」

俺、遠野志貴は言った。

「行きましょう、志貴、暇だし」

月姫 s i d e o u t

「シロウ、何か殺気を感じます。万が一の場合のときに備えて構えをとっておいてください」

セイバーからの突然の一言だった。

セイバーの視線の前には、俺と同じかちよつと上くらいの学生と、金髪で目の赤い不思議な空間を作った二人組だった。

「ああ、わかった」

「志貴、メガネを外しておきなさい」

アルクエイドが言った。

視線の前には同学年くらいの学生とこつちを警戒した女の子がいた。

「ああ、わかってる」

ちよつとすれ違つとき。

キーン！！

何かがぶつかり合うような高い音がした。

「アルクエイド!？」

「セイバー!!!」

振り返るとアルクエイドとセイバーが爪と剣を交えていた。

「貴女人間じゃないわね?」

「そつ言う貴女も人間ではないようだな!!!」

「私はアルクエイド、貴女の名前は？」

「私はセイバーとでも言っておきましょう」

「貴女？真名を名乗りなさい」

「知りたいのなら私を倒すことです！！」

再び戦闘を再開する二人。

士郎と志貴の二人は硬直状態が続いていた。

遠野志貴は迷っていた、先に動くべきか？

「投影二連！！」

どこから出したのかわからないが相手は剣を二つ投げていた。

「くっ！！」

ナイフで点を突き消滅させる。

「なに！？」

自然消滅じゃなく意図的に消されたしかも剣二つを一瞬で。

「本気で行かないと危ないな……投影、開始」

こうして本来なら出会うことのない人々の戦いの火蓋は落とされた。

第1話（後書き）

いやあああああ！

ネタが浮かばなくて頭が爆発しそうです！

志貴君と士郎君の戦いは丁度いいくらいなんですが。

アルクエイドとセイバーが難しいです。

次の話からはセイバーとアルクエイドを先に書く予定です。

第2話

セイバーとアルクエイドの戦いはセイバーの方が有利かと思われた。しかし、実際のところそれは、間違いだったのだ。

アルクエイドは吸血衝動を抑えるために70%の力を使っている。しかし、残りのたった30%でも並のサーヴァント二人分もの力がある。

そのアルクエイドが、万が一でも暴走すれば100%の力を何の抑制もなく全力で使うのである。

セイバーの場合はインヒジブル・エア風王結界で刀身が見えないはずなのだが。

「やああああ!!」

「ふっ!!」

キーン!!

アルクエイドに難なく弾かれる。

すでに見切られているのか、超人的な反射神経によって危機を察知しているのか。

なににせよ今までの剣撃は全てことごとく弾かれているのだ。

「そろそろ、本気出すわよ!」

「本気だと?今までは本気ではなかったと言うのか!!」

「ええ、今から私の本気見せてあげる!」

「くっ!!」

アルクエイドの威圧感が増すのをセイバーは本能的に感じていた。こちら奥の手を出さねば負ける!!

「マイプルファンタズム空想具現化!!」

「ストライク・エア風王鉄槌!風よ…吠え上がれ!!」

「おっと、危ない危ない」

「なに？我が鉄槌を回避したと言っのか！！？」

セイバーは驚いていた。

並のサーヴァントですら避けることは難しいはずなのだが、アルクエイドはそれを軽く避けて見せたのだ。

しかし、アルクエイドも驚いていた。

風の鉄槌を使われるなど思っていなかったからである。

二人とも相手の力量を計り間違えていたのである。

「風の鉄槌なんて始めてみたわ」

「貴女も恐ろしい技を使うようですね」

二人とも相手の力を再確認した。

ヒロインバトルsideout

第2話（後書き）

次は士郎と志貴の戦いになります。

それ以降は未定なので戦わせたいペアを募集します。

第3話

遠野志貴は冷静だった。

どこから出したかわからない剣が何本か飛んできたが、しっかりと点を突けば消えることがわかったからである。

「これなら、勝てるか…?」

それに比べて衛宮士郎は焦っていた。

先手を打って投げたはずの剣を志貴と呼ばれていた少年はナイフを使い一瞬で消したのだ。

「何なんだあれは、何かの魔術か？」

それとも何か特殊な力なのか？」

二人は思った。

一回仕掛けてみよう。

相手の力量を測らなければ勝ち目はない。

「投影……開始!!」

「また武器が急に手元に!!」

遠野志貴は少し驚いた。さっきまで確かに素手だった手には今、確かに剣が握られている。

しかも今度はさっきの白と黒の二つではなく黄金の剣だった。

「いくぞお!!」

剣を振り上げ、降り下ろす。

しかし、

「ふっ！」

キーン！！

剣とナイフがぶつかる。

そして志貴は動いた。

「見えたっ！！」

剣に見える黒い線をなぞり剣を切断していく。

「なに！！」

衛宮士郎は混乱していた、いや混乱するしかなかった。

バーサーカーの攻撃ですら受け止めることができた勝利すべき黄金の剣が目の前でバターを切るように、簡単に切断されたのだ。

士郎は決断した。

奥の手を使うことを。

「射殺す百頭」
ナインライフズブレイドワークス

「何だ…それは…！！？」

士郎と呼ばれた少年は異常なまでの大きな岩の大剣を振りかざしていた。

遠野志貴は本能的に危機を察知していたがそれと同時にこれは死んでしまう。

遠野志貴は本能に従い全力を出した。

衛宮士郎は武器を降り下ろした。

「うおおおおお！！！！！」

生きているかのような八つの斬撃を繰り出す。

「ぐあっ！！！」

武器の使用と同時に士郎の左腕を激痛が襲った。

射殺す百頭は使うと恐ろしく負担のかかる技なのだ。

全力の志貴には斬撃にも死が見える。

しかし、数が多かった。

八つも同時にこられては防ぎようがない。

「あまい！」

ヒュン！

ナイフを凄い勢いで連続でふった。

1、2、3と斬撃は消えていくが、やはり防ぎきれない。

「ぐはっ！」

一撃がわき腹を襲った。

二人とも戦闘を行うことは難しかった。

志貴はキズを負い、士郎は左腕が使えないのだ。

衛宮士郎がつぎの攻めを考えていると。

「くそっ、こんな……とき……に」

遠野志貴が持病によって倒れたのだ。

貧血なのにさらに血を失えば当然のことである。

「終わった……のか？」
ドサッ。

衛宮士郎も全身の力が抜けて気絶した。

第3話（後書き）

作者はアホなのでどうしても超展開になってしまっんです。

そこら辺を許してほしいです。

第4話

アルクエイドとセイバーの全力の戦闘は続いていた。

アルクエイドは余裕ありげに、セイバーは苦難の表情を浮かべている。

セイバーの想像以上にアルクエイドは素早くそして体術も上手かったのである。

このままではマズイとすら思ってしまうほどに、何より危険なのが爪を使った衝撃波とでも言うべきものがとても危ないのである。

「やあつ!!!!」

アルクエイドが腕を振るう。

ヒュン!!

「ぐああつ!!!!!!」

何よりの証拠にセイバーの左腕の籠手をバキツという音と共に粉碎されてしまった。

セイバーが苦悶の表情を浮かべていると。

ドサツ

なにかが倒れるような音が公園に響く。

アルクエイドとセイバーは二人とも音がした方向を向いた。

そこには、出血によって倒れた遠野志貴と力を使い果たし気絶した衛宮士郎がいた。

「志貴!!」

「シロウ!!」

アルクエイドは志貴に駆け寄った。

キズはたいしたことないようだが出血が酷かった。

そしてアルクエイドは同時に士郎という少年をみて驚いていた。

半暴走した志貴に一撃当てただけでもすごいことなのに、直死の魔眼で切られたあともなかったのだ。

セイバーは士郎に駆け寄った。

怪我はないのだが左腕の魔術回路がとても乱れていたのだ。

セイバーはとても驚いていた。

本気の士郎を相手にしてキズ一つしかついていない志貴と呼ばれた少年をみて。

アルクエイドから先に会話を切り出した。

「一時休戦にしない？お互いに倒れた人がいるし」

「それは、いい提案です」

「貴女の名前は？」

「アーサー王、名前はアルトリアと言いますがセイバーと呼んでいただけますか？」

「私は答えました。貴女の名前も教えて頂きましょう」

「私は、真祖アルクエイド・ブリュンスタッドよ、アルクエイドと呼んでほしいな」

「ではさよならですねアルクエイド・ブリュンスタッド、また縁があれば逢えるでしょう」

「アルクエイドって呼んでよー」

「ではさようなら」

「スルーすんなー!」

月姫 side

「一体なんなの？ロアの気配がしたから戻ってきて見れば、あんな人たちがいるなんて驚くわー」

「驚くつて、お前簡単にかわしてたじゃないか……」

「志貴？起きたの？」

「……ああ」

「キズは大丈夫？」

「大丈夫だと思う」

「なら話を始めるわ」

「ああ、いいぞ」

「想定外の人物たちとの出会いね」

「ああ。士郎とか言ったか？生きる斬撃をだされたのは想定外だった」

「ええ、少女の方はアーサー王って言ってたわ」

「アーサー王だって！？……それよりも！ロアが生きてるのか？」

「あくまで気配がただけよ。確定ではないわ」

「そうか……」

「それで志貴に提案があるわ」

「なんだ？」

「今日戦った二人に話をしたいから家探してきて」

「怪我人にやらせるのか！」

「私も探すわよ〜？」

「仕方ないなあー明日から学校の帰りにでもさがしつてみるよ」

月姫 side out

Fate side

「その話は本当かセイバー？」

「ええ、間違いなくギルガメッシュやアサシンなどのサーヴァント
それに士郎の知らないサーヴァントもいます」

「そうか…」

「ちよつと士郎、セイバー！？アーチャーがいるんだけどなんで！
！？」

「だから遠坂、説明したじゃないかなぜか現界したらしいんだ」

「セイバーはまた俺のもとに来てまた契約したそれだけだ」

「アーチャーは遠坂に契約してほしいんじゃないか？」

会話をしているとアーチャーがやって来て遠坂にこう言った

「そうだ、凜よ私と契約してくれ」

「まあいいけど」

「アーチャーもよく遠坂ともう一回契約しようと思ったな？」

「そんなことよりなぜお前はセイバーに運ばれてきたんだ？」

「それは……」

さっきまでの戦いについて話した。

「なるほど。真相か、厄介ね」

「？何でだ？」

「真相は夜は死なないのよ」

「やはりそうでしたか。さすがにあの身体能力と威圧感は尋常ではありませんでした」

「どうすればいいんだ？」

「衛宮君は学校が終わりしだい町をブラブラして志貴という少年の方を探しなさい」

「何でだ？」

「もし仲間になってくれたら嬉しいじゃない」

「私は真相の方をアーチャーと一緒に探してみるから」

「ああわかった」

こうして長い一日が終わろうとしていた。

第4話 (後書き)

次回はまだ浮かんでないので見ていただいた方々ネタの方を何かあれば！

これからも頑張って行きます

第5話

F a t e s i d e

翌日の夜。

「今日は見つからなかったな」

「ええ、しかし毎日探せばきっと相手側から来てくれるはずですよ」

「ああ、そうだな！明日も頑張るか！」

遠坂とアーチャーも探してくれているのに見つからないなんて、真相は気配を消すのがよっぽど上手らしい。

アーチャーには、弓兵のスキルで鷹の目があり町全体までなら見渡せるのだ。

「しかし、アーチャーでも見つけれないなんてな」

「ええ、こちらから探すのは難しいようです」

ピンポーン！！

「すみません」

「こんな時間に誰だろうな？ちょっといつてくるよ」

「はい、どちらさまですか？」

「私はキャスターのサーヴァントですよ」

「キャスターだって？」

ガララッ！

玄関を全力で開けると、そこには見覚えがないサーヴァントがいた
「どうも、こんばんは。ここにマスターの気配がしたのでやって
来ました」

頭の狐っぽい耳をピコピコさせながら言う

「お前はキャスターなのか？」

「はい！クラスはキャスターですよ？」

一瞬嫌な予感がしたが気のせいだったようだ。

「そうか、マスターを探しているっていつてたな？」

「はいそうです！」

「残念だけど俺はもう契約しちゃってるんだ」

そう言って令呪を見せる土郎。

「そうなんですか」

シヨボンと尻尾をだらんとさせる。

「なんか、申し訳ないな。すこしあがっていくか？」

「いいんですか！」

表情が明るくなり尻尾をフリフリさせ始める。

「ああ〜！知らないサーヴァントがいる！」

そう言うなり部屋に飛び込んできたのはイリヤスフィール・フォン・アインツベルン通称イリヤだ。

「ああ、現れたばかりでまだ契約してないからマスターの気配を探つて家に来たそうだ」

説明をすると。

「じゃあ、私のサーヴァントになってよ！！」

いいながら尻尾をさわり始めるイリヤ。

「けど私、女の人より男の人の方がいいんですよ〜」

「そうなんだ〜、残念だわ〜」

尻尾と全力でじゃれあっているイリヤ。

「そうだ！！」

イリヤは部屋を駆け出して行った。

「なんなんだいったい？」

「さあ、どうしたんでしょうね？」

ドタタツ！！

「ぜえ…ぜえ…これ…だわ…！」

そう言っただけで渡してきたのは、ルールブレイカー…！？

「そうよ！これがあれば士郎にキャスターを契約させられることができるわ…！」

そういつてキャスターの胸あたりにルールブレイカーを刺した。

そして、士郎の腕にも刺した。

サクッ

「これでできたんですか？」

「ええ、そうよ！」

えへんと胸を張るイリヤ。

士郎は腕に鈍い痛みを感じた。

「令呪が…！」

「やりました！これで今日から貴方が私のマスターです！」

尻尾の後ろでイリヤがキヤーといいながらもふもふしてるのを見てすこし羨ましく思った士郎。

「さわりたいんですか、ご主人様？」

「ご主人様！！？」

ご主人様と呼ばれ焦る士郎。

キヤスターは士郎がマスターになってすぐにご主人様と呼び方を変えてきたのだ。

「ええ、私はマスターをご主人様と呼ぶことに決めました！」

「決めました！って言われてもな、マスターとか士郎とかじゃ駄目なのか？」

「ええ駄目です！私が決めたんですからそう呼ばせてください！」

「そう言われても、なれないからなあ」

「慣れるまで呼び続けましょうか？」

そんなことされたらセイバーと遠坂に殺される！！

「い…いや、大丈夫だよ！！それよりも俺はキヤスターって呼べばいいか？」

「はい！」

「明日、説明するのが大変そうだ」

士郎はため息をついた。

「ところで、尻尾触ります？」

「いいのか？」

「いいですよ、私のご主人様ですから」

その日の夜、眠りに落ちるまで士郎とイリヤが尻尾を触っていたのは言うまでもない。

第5話（後書き）

キヤス狐登場でイリヤが壊れましたね！

次の話しは月姫の方を書く予定ですよ！

第6話

翌日の朝…

「うーん…(フニフニ)」

何か柔らかいものが…？
もう一回触ってみよう！

「(フニフニ)」

「ご、ご主人様そんなところ／＼／」

「ハッ、キ、キャスター！！？なんてお前が俺の布団で寝てるんだ？」

布団から飛び起きる土郎。

「うーん、ふふふ」

イリヤはキャスターの尻尾を抱き締めて笑顔で眠っている。

「イリヤまで？」

「昨日、ご主人様とイリヤちゃんが私の尻尾を触ったまま寝てしまったから匂いをたどってご主人様の部屋に運んだんです！」

だんだんと記憶が蘇る。

「なんだって、キャスターが運んだのか？」

「はい！そうです」

「おはよー」

「おはようございます、イリヤちゃん」

「お、おはようイリヤ、いつから起きてたんだ？」

「んー？さつきだよー？」

キャスターがそばに来て耳打ちする

「さつきのことは内緒にしてあげますよ」

「ああ……」

うーん、何か忘れてる気がするんだよね？

「そつだー！…こんなことしてる場合じゃない！」

そこで士郎は気付いたセイバーと遠坂になんて説明しようか、桜と藤ねえにも

「ど、どうすればいいんだー！…！」

頭を抱え崩れ落ちた士郎

「どつしたの！…？シロウー！…！」

「ああ、イリヤか…」

「キヤスターの事をなんて説明しようかと思ってね」

「そ、それは難題ね…」

〈朝食の時間〉

「…と言うわけで、イリヤがなついちやっただ。」

経緯を話し終える。

「良いわよね、大河」

イリヤが大河に甘えたような声で近づく。

「イリヤちゃんになついちやっただなら、仕方ないわよねえ」

と大河が言った瞬間。

「認めません！」

「認めないわ！」

「駄目です！」

桜、セイバー、遠坂の三人が同時に叫んだ

「何だよ！」

とイリヤが叫んだ。

「それは、サーヴァントでしょう、イリヤスフィール！シロウもシロウだ！なぜ私に断りもせず契約したのです！」

士郎は怒りの矛先が自分に向いてきたことに焦った。

「そ、それは…」

士郎が言葉に詰まっていると、

「仕方ないじゃないですか、私はこのご主人様に運命を感じてしまったんですから」

とキャスターが一言。

「士郎やっぱりあなたはここで殺っておかなきゃいけないわね！」
と凜がキレる。

「私もそう思います！」

と桜も立ち上がる。

「シロウやっぱり貴方は私が一から鍛え直してあげます！」
とセイバーも騎士甲冑を纏う。

「ちょっとまって！お前ら三人は洒落になってないぞ！」

「」「」問答無用！」「」

「うわぁー！！！！」

と士郎は叫んだがいつになっても衝撃がこない。

「私のご主人様に怪我はさせませんよ！！」

攻撃はキャスターによって防がれていた。

士郎は驚いていた。

三人も目を見開いて驚いている。

凜の攻撃ならアンチ・マジックのスキルで何とかなれると思う。

しかし、物理的な攻撃のセイバーの剣舞や桜の射も防いでいたのだ。

「完全な状態の私をなめないでくださいね」

こうして乙女？たちの戦いが始まったのだ。

第6話（後書き）

次から戦闘ですね！

話はだいたいできてたりできてなかったりでまた更新が遅くなりそうです。

第7話

戦いは始まったのだ。

キャスターの驚異的な回避を目の当たりにしたセイバー、凜、桜の三人は次なる攻撃の手段を考えていた。

キャスターという邪魔者を排除するために三人の思考はほぼ同じことを考えられるまでにシンクロしていた。

それこそアイコンタクトだけで次の攻撃を始められるほどに。

凜がセイバーと桜に視線を送った瞬間

「やあああ!!」

セイバーはキャスターに切りかかった

「ふっ!」

桜も弓矢い使い援護してキャスターの足止めをした。

その間に凜は魔術の準備に入っていた。

以前やった宝石魔術の重ねがけと相乗である。以前戦ったキャスターのときはマントに魔術を吸収されてしまったが今回はそれらしいものがないから通用すると思ったのだ。

「セイバー!、桜!、下がって!」

キャスターがセイバーと桜の攻撃を回避するために距離をとった瞬間

「あれあれ？何か仕掛けてくるみたいですね、見物といきましよう」

キャスターは余裕綽々といった表情である。

「いくわよー！」

「Drei(3番)」

「Fünf(5番)」

「Sechs(6番)」

「Entfesselung(一斉解放)！」

「ふうん」

キャスターの感心とも聞こえなくもない声が聞こえる。

「Jetzt noch vier(加えて四番)」

「Vereinigung der Kraft(相乗)！」

「いつけえー！」

キャスターめがけてとんでいく魔術しかし士郎は嫌な予感しかしていなかった。

「毎回いいマスターに恵まれずに全力が出せなかったので今回は本当にラッキーですね、せいや」

バシユン！

キャスターは自分の回りを浮遊させていた円盤で魔術を打ち消してしまっただけだった。

「今回は全力を出せるマスターですので本気出しちゃいますよ」

凛たちは驚愕した。

「今までの本気ではなかったのですか！！」

セイバーが叫ぶ。

「まだ五割くらいですよ」

キャスターがニコニコしながら答える。

きつと、悪魔の微笑みつつ言うのはこの事を言うのだらうと土郎は思ったのだった。

「さて今度はこっちから行きますよ」

セイバーたちは戦慄していた。

今までの本気でないのなら自分たちはとんでもないものにケンカを売ってしまったのではないかと。

「まず、そこにいるたしか桜とか言う人！貴女からやっちゃいますから」

桜は逃げようとしたがそれは叶わなかった何故なら戦慄で足が動か

なかつたからである。

「燃えちゃえ」

キャスターの手元から札が投げられる。

士郎はやめる！と言おうとしたがキャスターにウインクされたので
だまっていた。

桜は燃えると言つよりは爆発に近いもので空に飛ばされた。

「いやあああ……」

悲鳴が耳に残る。

落ちてきた桜を士郎がお姫様だつこで受け止めると…

すぐに土下座スタイルに変わり

「キャスターさん、ごめんなさい」

と怯えた犬の様な眼差しで謝った。

「いえいえ〜 これから仲良くしましょう」

セイバーと凜は叫んだ

「私たちを忘れるなー！」

キャスターはやれやれといったかんじである。

「まだやるんですか？今の私の一撃見ませんでしたか？もしかしてM何ですか？」

「Mじゃないわよ!」

凜が叫んだ。

そして

「悪かったわよ、ごめんなさい」
と言った

「はい 良くできました〜ご褒美に尻尾を触らせてあげましょう」と言い尻尾をふりふりするキャスター。
凜と桜は尻尾に遊ばれていた。

セイバーは羨ましそうに見ていたがハッと我にかえるとキャスターに斬りかかろうとしたが…

「!?!」

キャスターに札を投げられていたのか足元が凍っていて動けなかった。

「まだ降参しませんか」
とキャスターは言った

セイバーは珍しく冷や汗だらだらに全力で答えた。

「すみませんでした!私も尻尾が触りたいです!」

士郎が言った。

「セイバー降参と欲望が同時に出ちゃってるぞ」

セイバー以外のその場にいた全員が笑いあっていた。

「楽しそうね」

屋根の上からの声に全員が振り返る。

そこには

「何故貴女がいるのですかアルクエイド・ブリュンスタッド！」

その場の全員に戦慄が走る。

「いやあくちよつと協力してほしいかな〜って思ってたね！」

次回に続く

第7話（後書き）

キャスターが無双ですね

次はいつ更新できるかわかりませんががんばります！

第8話（前書き）

引き続きお楽しみ下さい。

第8話

第7話より…

「協力……ですか？」

突如屋根の上に現れたアルクエイドにセイバーが疑問を投げかける。

「そつ、協力」

とアルクエイドが言うが……

「冗談ではないぞブリュンスタッド！」

とセイバーは即答したが

「協力の内容によっては受けよう」

と土郎が言った。

「な！？何を言うのですかシロウ！私たちは以前あのブリュンスタッドともう一人の少年に殺されかけたのですよ！」

とセイバーが反論するが土郎は

「だからだよ」

と言った。

「え？」

とセイバーが驚いた表情をみせる。

「だから奴らと協力した方がいいし協力出来れば敵も減るだろ？」

とシロウは言った。

「それは………そうですが……」

「もういいかしら？」

アルクエイドから話しかけられる。

「内容を話すけど強大な力を持ったものたちが最近復活したのはわかってるわね？」

「まあ………少しだけ……」

と土郎が言う。

「その強大な力を持ったものたちの中には当然私達が死に物狂いで戦った相手たちもいる訳なのよ」

「なんだって！じゃあギルガメッシュも生き返っているのか！？」
と土郎は言った。

「さあ？私は対峙したことないからわからないけどいるかも知れないわね」

「そんな……」

とセイバーが漏らす。

「ちょっと！ちょっと！そんな落ち込まないでよ！私達の敵だって

生き返ってるんだからねっ！」

「そうだったな…」

「それで協力の内容はその敵を見つけしだい殺すことよ、敵は異様な雰囲気をしているから一発でわかるはずよ！」
とアルクエイドが言う。

「お前たちの方の敵の事だろそれは？こっちの敵は外見は普通の人間と一緒になんだがわかるのか？」
と士郎が言った。

「魔力の流れとかでたぶんわかると思うから大丈夫よ！」
とアルクエイドが胸を張って言った。

「それ、威張れるのか？」
と士郎があきれたように言う。

「あれ？あのくたしか志貴とか言ったか？今日は一緒じゃないのか？」
と士郎は築いたように言う。

「貴方が負わせた傷のおかげでね」
アルクエイドが士郎を見ながら言った。

「あはは…あのときは全力だったから」

というやり取りが行われているその頃…

「ふう〜もう動けるか〜」
遠野志貴は目覚めていた。

「あの士郎とか呼ばれてたか？あいつの生きているかのような斬撃
ありゃ反則だな」

などと言いつつ夜の町に探索に出ていた。

「アルクエイドのやつどこいったんだ？いつもの公園にはいなかったしな〜」

適当に探索を続ける志貴。

「あれ？人が…」

志貴が気づいたときには回りに人はいなくなっていた。

「おや？俺と同族の目の持ち主のようだな」

「誰だ！」

志貴が振り返るとそこには赤の革ジャンをきた女性がいた。

「お前…！その目は…！」

志貴は驚いたように言う。

「その眼……俺もお前も大層な大凶の持ち主らしいな」

「知らないのか？大凶に当たるのは……選ばれし者の証らしいぞ」

「へえ…そいつは知らなかった」

「なら、覚えておくといい」

「まあ、私の依頼人の命令だ大人しく消えてもらっぞ」

「そうはいかない俺にだってやることがあるんだ」と言っ
てナイフを構える志貴。

「そっだ、その殺気、存分に殺さないとなあ！！」

こうして直死の魔眼どうしの戦いが始まったのだった。

第8話（後書き）

次回からついに両儀式vs遠野志貴の始まりですよ！

書いててテンション上がりまくり何ですが難しくって挫折しそうです。

応援してくれる皆ありがとう

そして頑張ります (^・^v

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3840t/>

TYPE-MOON総合～紅い月の下の死闘～

2011年10月9日03時36分発行